

全国学力・学習状況調査の結果を授業改善にどう生かすか

～山梨県学力向上アドバイザーの経験から～

都留文科大学 鶴田清司

1. 全国学力・学習状況調査を取り上げる理由

○2007年（平成19年）から始まった全国学力・学習状況調査は、調査結果を教育施策・教育実践の改善に生かすことを目的としている。

【全国学力・学習状況調査の趣旨】

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

1. 全国学力・学習状況調査を取り上げる理由

○2007年（平成19年）から始まった全国学力・学習状況調査は、調査結果を教育施策・教育実践の改善に生かすことを目的としている。

本課題研究のテーマ「調査研究と教育政策・実践」という問題、もっと言えば、国や学会レベルの「調査研究」と「教育政策・実践」の関係について考えるのに最適な事例である。

(cf.第1回の富山哲也氏の報告)

2. 全国学力・学習状況調査に対する基本的スタンス

▼全国学力・学習状況調査には、外部評価によって学校の自主的努力や教育の自律性を侵害する恐れがあり、その結果、管理強化、点数競争と序列化、テスト体制への道を開く恐れがある。

▼エビデンスとして「B問題」に課題があるという事実は自明であるにもかかわらず、毎年巨費を投じて悉皆調査を行う必要があるかどうか疑問である。

▼テストの「妥当性」、評価の「真正性」として、実際の問題解決場面とのズレという問題もある。

(ex.2008年中学校国語B問3)

◆全国学力調査(2008年度中学国語B)の「問3」

「全然明るい」という言葉の使い方の是非について、南さんに賛成か原さんに賛成か、次の条件のもとで、自分の考えを理由を付けて述べる問題。

条件1 レポートにある国語辞典の記述やグラフの内容を根拠にして書くこと

条件2 根拠とした国語辞典の記述やグラフの内容を具体的に挙げて書くこと

条件3 (略)

→平均正答率53.7%、上の条件を満たしていないもの18%。

【正答例1】

私は南さんの考えに賛成します(主張)。なぜなら、どちらの国語辞典にも否定的表現を伴う場合と伴わない場合の2種類の使い方が載っている(根拠)、どちらの使い方をしても良いと思うからです(理由)。

【正答例2】

私は原さんの考えに賛成します(主張)。なぜなら、グラフの総数を見ると『全然明るい』と言うことがない人が78.6%もいて(根拠)、『全然明るい』は、だれもが使う一般的な言い方とは言えないからです(理由)。

◆全国学力調査(2008年度中学国語B)の「問3」

「全然明るい」という言葉の使い方の是非について、南さん(使ってよい)に賛成か、原さん(使わないほうがよい)に賛成かを述べる問題。

なぜ、二者択一の問題になるのか?

(PISA2000「落書き」問題)

実際は、その時々状況によって、「全然明るい」と言うときもあるし、言わないときもある。親しい友人との会話の中では使うが、公的で改まった場では使わない。→解答不能?

言語行為の文脈規定性が不問にされている。

○しかし、実際に調査が行われている以上、それをより意味のあるものにしていかなくてはならない。

3. 山梨県学力向上対策会議の趣旨と内容

○学力向上対策会議の目的

山梨県教育委員会は、有識者を学力向上アドバイザーとする「学力向上対策会議」を設置し、学力向上に関する事業内容及び実施効果並びに改善の方向性について、学力向上アドバイザーから助言を得ることで、本県の「学力向上総合対策事業」の充実を図り、本県児童生徒の学力向上を目指す。

○学力向上対策会議の構成

- ・学識経験者 4 名
- ・学力向上対策監、義務教育指導監、教育指導担当課長補佐、担当指導主事（初等教育リーダー、学力PT 4 名、国語・算数数学 4 名）

3. 山梨県学力向上対策会議の趣旨と内容

○学力向上アドバイザーの役割

次の各事項について助言等を行う。

- ①山梨県が推進する学力向上施策全体の方向性について
- ②山梨県学力把握調査や全国学力・学習状況調査等の結果をもとに分析した本県児童・生徒の学力に関する課題と改善の方向性について
- ③山梨県の指定する研究推進校の研究内容等について
- ④その他、山梨県の学力向上推進に関連する事項について

3. 山梨県学力向上対策会議の趣旨と内容

○学力向上アドバイザーの役割

次の各事項について助言等を行う。

- ①山梨県が推進する学力向上施策全体の方向性について
- ②山梨県学力把握調査や全国学力・学習状況調査等の結果をもとに分析した本県児童・生徒の学力に関する課題と改善の方向性について
- ③山梨県の指定する研究推進校の研究内容等について
- ④その他、山梨県の学力向上推進に関連する事項について

平成26年度から学力向上アドバイザーを務める。毎年4回開催される学力向上対策会議に出席。毎年1回実施される「学力向上フォーラム」の基調講演も2回行っている。

4. 学力調査のデータの活かし方

重要なポイント

- ①日々の授業の改善につながる調査研究であること
- ②学校（教師や子どもたち）に希望やインセンティブを与える調査研究であること

①日々の授業の改善につながる調査研究であること

- ・学力調査は、ふだんの授業の改善への道筋がはっきりと見えるように活用することが必要である。調査のための調査や「一人一実践」のための資料で終わってはならない。
- ・そのためには、調査データの解釈が非常に重要になる。2007年の第1回調査以来、根拠（客観的な事実・データ）に基づいて自分の考えとその理由を述べることに課題がある。
- ・2012年度も、「書くこと」における課題として「調べて分かった事実に対する自分の考えを、理由や根拠を明確にして書くこと」があげられている。2017年度も同様である。

（国立教育政策研究所2012, p.6）

これだけで教育現場の指針となるか？「理由」と「根拠」のちがいは何か、教師に分かりやすく説明する必要がある。

②学校（教師や子どもたち）に希望やインセンティブを与える調査研究であること

- ・学力調査は、とかく得点の低いネガティブな部分がクローズアップされがちであるが、それだけでなく、ポジティブな部分にもっと目を向ける必要がある。
一教師や子ども、さらに保護者に自信や希望を与え、インセンティブを高める。
- ・山梨県は全国平均を下回ることが多く、どうしてもウィークポイントに目が向きがちであった。これでは教師も子どもも意気消沈してしまう。しかし、学習状況調査（質問紙調査）を見ると、全国平均をはるかに上回るものが多い。
私は学力向上対策会議の席上、山梨の子どもや教師の良さをもっとアピールしてほしいと助言してきた。
- ・今年度の調査結果をまとめたリーフレットはその点で大きく改善されている。

5. 学力調査の分析結果とそれに基づく授業改善プランの策定(2017年度)

本年度の学力調査問題の分析結果と授業改善の施策

全国版（国立教育政策研究所の報告）と県内版（山梨県教育委員会の報告）を比べてみると・・・

2017年度 小学校国語B3三の問題

(山梨県39.4%,全国43.7%)

【話し合いの様子の一部】の中の B のところで、田中さんは、【物語の一部】の言葉や文を取り上げながら、松ぞうじいさんとび吉がきつねであると考えたわけを話しています。
あなたが田中さんなどのようなわけを話しますか。次の条件に合わせて書きましょう。
〈条件〉
○ の横山さんのように、【物語の一部】から言葉や文を取り上げて書くこと。
○ 取り上げた言葉や文をもとに、どうして松ぞうじいさんとび吉がきつねだと考えるのかを書くこと。
○ 六十文字以上、百字以内にまとめて書くこと。

○問題の趣旨

物語を読み、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる。

○学習指導要領における領域・内容

〔第5学年及び第6学年〕

C 読むこと

エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。

B 書くこと

ウ 事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。

【国立教育政策研究所の分析】

○学習指導に当たって

(1)(2)略

(3)物語を読み、**叙述を基に理由を明確にして**、自分の考えをまとめる。

叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめるためには、一つの場面の叙述だけを対象とするにとどまらず、複数の場面を比較したり、物語全体に広がっている複数の叙述を関係づけたりして読むことが重要である。さらに、高学年においては、場面の展開に沿って読みながら、感動やユーモア、安らぎなどを生み出す優れた叙述に着目して自分の考えをまとめることができるように指導することが大切である。また、象徴性や暗示性の高い表現や内容、メッセージや題材を強く意識させる表現や内容などに気付き、自分の表現に生かして感想などをまとめることができるように指導することも考えられる。（「平成29年度全国学力・学習状況調査 小学校国語 解説資料」2017.4）

○叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめる際、その叙述を見付けるためには、場面の展開に沿って、登場人物の言動や心情の変化を捉えて読む必要がある。さらに、高学年では象徴性や暗示性の高い表現や内容、メッセージや題材を強く意識させる表現や内容など、感動やユーモア、安らぎなどを生み出す優れた叙述に着目して読むことが大切である。具体的には、色や情景などの描写から受けるイメージを交流することなどが考えられる。本問においては、「あたりの木がいっせいにさきさきとゆれて」、「林の木がこたまするように」などの情景描写から、「不思議な感じがする」、「何かが起こりそうな感じがする」などと捉えることができるように指導することが考えられる。

また、一つの場面の叙述だけを対象とするにとどまらず、複数の場面の叙述を相互に関係付けながら読むことができるようにすることが大切である。具体的には、物語全体を見通すことができるような学習シートを用いたり、感想を記入したカードやノートを活用したりしながら、どの叙述に着目したのかを明確にすることができるように指導することが考えられる。本問においては、「山野さんは、むかいあったふりをばかりとうつつきました」と「き、きつねの写真だ」、「むかいあった大きなきつねと小さなきつね」などの複数の叙述を関係付けて読むことが考えられる。さらに、それらの叙述を取り上げながら、「叙述を基にしてどう考えたのか」を交流することで、それぞれの考えが自分の体験や読書経験に基づいていたか、他の叙述と関係付けられていたかなどに気付くことができるように指導することも大切である。

(国立政策研究所『平成29年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語』2017.8)

【山梨県教育委員会】

〔具体的な学習指導の例〕

- ・低学年、中学年で学習した、場面の展開に沿って、登場人物の言動や心情の変化を捉えて読むことを再確認する。
- ・高学年では、登場人物の相互関係、象徴性や暗示性の高い表現や内容、メッセージや題材を強く意識させる表現や内容などに着目して読む。
- ・複数の場面の叙述を相互に関係付けながら読む。
- ・「どこからそう考えたの」「どうしてそう考えたの」という問い返しの意図を明確にして指導する。
- ・「どこからそう考えたのか」「どうしてそう考えたのか」を交流することで、それぞれの考えがそれぞれの体験や読書経験に基づいていたか、他の叙述と関係付けられていたかなどに気付くように指導する。

(山梨県教育委員会義務教育課2017)

○「どこからそう考えたの」は根拠を問う発問、「どうしてそう考えたの」は理由を問う発問である。

「山梨県学力向上アドバイザー」の立場から、私が学力向上対策会議や学力向上フォーラム、さらに郡市指導主事会などで繰り返し提唱してきた「根拠・理由・主張の3点セット」がこうした提言のベースにはある。

○全国学力・学習状況調査の目的は、調査結果を「教育施策の改善」や「教育指導の充実」に生かすことにある。だとすれば、学習指導要領に「根拠となる叙述をもとに理由を明確にして、自分の考えをまとめ、発表し合う」といった読みとその交流に関する事項を盛り込むべきである。次回の改定に期待したい。

学習語彙としての「根拠」と「理由」

学習指導要領で「根拠と理由を区別する」という表現が用いられないのは、「根拠」と「理由」が日本語では同じような意味を持つため、使い手（教師や子ども）が混乱するのではないかという危惧があるのだろう。

しかし、各種の国語辞典を見ると、「根拠」は「よりどころ」、理由は「わけ」と説明されている。

『日本国語大辞典 第二版』

根拠……もととしてよること。また、そのよりどころ。基づくところ。

理由……物事がそのようになったわけ。子細。

国語辞典による説明も私の考え方と一致している。

国語科は、こうした「根拠」と「理由」のちがいを明確化して、子どもたちが学習語彙として習得・活用していくようにすべきである。

「根拠・理由・主張の3点セット」が日々の授業に根づくために

全国学力・学習状況調査が「教育の過程を合理的にコントロールする」ものとなる危険（松下良平2015『教育学研究』82巻2号）

×トップダウンによる単なる型（思考スキル）の押し付け

○子どもを深い学びに誘うという授業の事実の認識

（『生活世界的エビデンス』今井康雄2015）

理由づけにおける自分の既有知識・生活経験からの類推の有効性（学びの対象の実感的理解）

+

○教師の実践的知識と結びついていること（理論と実践の統合）

（「自分もそのことが大切だと考えてきた」）

（「自分も同じようなことを実践してきた」）

6. まとめ

①「日々の授業の改善につながるような調査研究」であるためには、研究者がその調査研究の本質を見据えた理論的枠組を持つこと、学校や教育行政（指導主事）との良好なコラボレーション（信頼と協働）の関係を持つこと、現場の教師が理解しやすい実践的言語も交えて伝えることが必要である。

②「学校（教師や子どもたち）に希望やインセンティブを与える調査研究」であるためには、学力や学習状況におけるネガティブな部分を強調するのではなく、まずはポジティブな部分に目を向ける必要がある。